



# 南の光明

The Catholic Diocese of Naha Newsletter

今年の教区の目標

ゆいまーるの心で  
あらゆる絆を深めよう！

〒902-0067 那覇市安里3-7-2  
カトリック那覇教区本部  
TEL.098-863-2020 FAX.098-863-8474  
発行人 W.F.バートン司教 1部40円  
<http://www.naha.catholic.jp/>

(1) 2021年5月1日 (毎月1日発行) カトリック那覇教区報 MINAMI NO KŌMYŌ 第750号 (5月号)

五月、花咲きはこる季節。この美しい季節を、カトリック教会では、「聖母月」として聖母マリアに捧げる習慣が生まれました。世界各国に広まり、五月の美しい習慣として引き継がれ、聖母マリアに対する祈りが捧げられています。

## 聖母月

あお葉わか葉に  
風かおりて  
せせらぎに聞く  
奇しき調べ  
木かげに立てる  
とわのみ母  
みもとに行き  
我ら憩わん

十字架上のイエスによって弟子の使徒聖ヨハネに私たちの母として示された聖母マリアを思い、聖母に倣うように努めていきたいと願う人々の心から、この信心が生まれ広まってきたのでしよう。

イエスの生涯が受難の連続であったように、聖母マリアの生涯にも喜びと共に多くの苦難がありました。

古くから教会は、聖母の生涯をいろいろな形で記念してきましたが、聖母マリアの生涯は、シメオンによって預言された通りでした。シメオンは、幼子イエスの奉獻の際、聖母マリアに「あなた自身も剣で心を刺し貫かれます(ルカ二・35)と預言しました。しかし

オを唱えたことから全教会に広まったと言われています。ロザリオの祈りは、単純に「アヴェ・マリアの祈り」を繰り返して唱えるだけではなく、聖母マリアとともに、キリストによる救いの出来事を黙想することができるよう編まれています。



し、聖母マリアは神への信頼を失わず、謙遜に、すべてを心に納め、ひたすら従順に、イエスの救いの業への参与を果たしたのです。

聖母マリアに霊的なバラの冠を捧げるものとして、幾世紀にもわたって大切にされてきたロザリオという祈りがあります。聖ドミニコとドミニコ会士が異端と闘った際、「祈りの武器」としてロザリ

想しながら唱えていたロザリオの祈りに「光の神秘」として五つの神秘を加えられました。

聖教皇ヨハネ・パウロ二世は、キリストの受肉と隠れた生活(喜びの神秘)の次に、キリストの公生活の中の重要な出来事(光の神秘)を付け加えられ、それからキリストの受難(苦しみ)の神秘、復活の栄光(栄えの神秘)を黙想するよう勧められました。

これらの神秘を黙想することによって、イエスの最も近くにいる、イエスに従い、イエスの救いのわざに深く関わり続けられた聖母マリアを通してイエス・キリストとの一致に向かうことができるのです。

聖母月を迎え、神の母、教会の母であり、天の栄光の中でイエスとともにおられる聖母マリアに、子としての愛と信頼をもって取次ぎを願って参りましょう。

二〇〇二年十月十六日、聖教皇ヨハネ・パウロ二世は、使徒的書簡『おとめマリアのロザリオ』を発表、その中で、伝統的信仰心であるロザリオを、キリスト教的祈りの中でもっとも優れたものとして、現代における様々な危機の破壊的力と戦うため、その実践を強く勧められました。これに伴い、それまで喜びの神秘と苦しみの神秘、栄えの神秘の十五の神秘を黙

アヴェ・マリアの祈り  
アヴェ、マリア、恵みに満ちた方、主はあなたとともにおられます。あなたは女のうちに祝福され、ご胎内の御子イエスも祝福されています。  
神の母聖マリア、わたしたち罪びとのために、今も、死を迎える時も、お祈りください。  
アーメン。

## Saint Joseph in the midst of the COVID-19 crisis

By : Fr. Joseph Bui

Now our lives are shaken by the coronavirus crisis: FEAR. There are many reasons for us to be concerned and careful, most of all the health and well-being of our family, our friends, and especially the elderly among us. We also think of all those who are isolated, those who are infected, those who have died and are dying, in our own places and around the world.

In the midst of this crisis, Pope Francis announced this year from Dec. 8, 2020, to Dec. 8, 2021, as the “Year of St. Joseph.” in honor of one of his favorite saints. With his apostolic letter “Patris corde” (“With a father’s heart”), Pope Francis invited us to look at the life of St. Joseph, to ask for his intercession, and to imitate his virtues.

In the pope’s apostolic letter, he considers the image of St. Joseph as father and lists seven characteristics to keep in mind in this pandemic calamity. These traits apply to all of us, not just fathers. We may read “Patris corde” and deepen our friendship with St. Joseph.

So, one important thing to learn from Joseph’s life is the deep trust in God. Trust does not make things easy. Trust can be difficult to find and hang on to. But putting our trust in God is the best insurance policy, no matter how difficult or uncertain things may be in our lives. Our lives may be at a standstill, the stock market can plummet, everything around us can change, but God remains faithful. We can put all our trust in Him and never be disappointed. This is not because God will keep everything bad out of our lives, but because no matter what we face, God never abandons us, and He always leads us towards what is best. He brings springtime flowers out of the barrenness of winter. He can make beautiful things spring even from the darkest part of our lives.

Saint Joseph knew this. The Gospel of Matthew tells us that when Joseph learned that Mary was pregnant, knowing that he was not the father, Joseph was ready to let her go quietly. He did not want to denounce Mary because otherwise she would be stoned to death for infidelity by the Jewish authorities. Joseph wanted to spare Mary but, at the same time, didn’t want to continue with their relationship. An angel appeared to him in a dream bringing God’s message: “Joseph, son of David, do not be afraid to take Mary as your wife, for the child conceived in her is from the Holy Spirit. She will bear a son, and you are to name him Jesus, for he will save his people from their sins” (Matthew 1:20-21). And when Joseph woke from his sleep, he did exactly what the angel had told him and took Mary as his wife.

In the midst of uncertainty and doubt, Joseph had the courage to let God change his plans. He put all his trust in God and followed what God wanted even more than his own personal judgment. Joseph put into action the timeless words of the Book of Proverbs: “Trust in the Lord with all your heart, and do not rely on your own understanding” (Proverbs 3:5).

This is the challenge for all of us, every day of our lives and especially in moments of crisis, like the one we are facing together in these days. How can we put all our trust in God like Joseph? How can we listen to God’s voice saying to each one of us: “I am with you, I am near you, I never abandon you, I love you…”

Joseph’s life was not easy. He took Mary as his wife and cared for her and Jesus even when they had to flee for their lives to Egypt. Jesus learned from Joseph in his work as a humble but skilled carpenter and builder. Joseph’s character and example taught Jesus and left his mark on our Saviour. Like Jesus, let us follow his example and fight the virus of fear by trusting in God more and more each day.

So, now we are entering into the month of May, we know May 1, as the feast of St. Joseph the Worker. We ask St. Joseph to pray for us and to protect us, just like he protected Jesus and Mary. St. Joseph was the protector of the Holy Family and he is also the patron and protector of the Catholic Church. We can always turn to St. Joseph for his prayers and protection. It’s also important for us to remember in prayer all those who are out of work during this crisis time, all those who have lost their employment because of the COVID-19 crisis. We ask St. Joseph to intercede for them.

And finally, in this time of the coronavirus crisis, we turn not only to Joseph but also to Mary. As month of May is “Month of Mary” “We turn to Mary as the Mother of the Church so that she can provide for us, her children, and for all humankind. We ask her to take care of all humanity because we recognize, especially now, that circumstances make it difficult for members of the Church, all of us here, to take care of each other. .



あまり知られていない

大聖人：聖ヨセフ

マイケル・ヴィン神父

石垣教会 主任司祭



捧げて、イエスと聖母マリアを愛したの... 一方、聖人達も...

まもなく五月が始まり、聖母マリアの月を迎えるにあたって、私達は生花や霊的な花束を愛する母マリアへお捧げします。

には、私達と同じく多くの欠点を... その聖ヨセフの根本的な態度...

と委託です。マタイの福音によれば「ヨセフは正しい人」... ① 天使は、妻マリアが「身ごもつ...

な不便、危険、極度の貧困、異郷への大困難があつたはずだが、天使のメッセージに彼は従つた。③ ヘロデの死後、天使はヨセフにイスラエルの地に戻るよう...

していません。特に素晴らしいのは、イエス会の創立者であるヨラの聖イグナチオが「聖ヨセフはキリスト信者の一番良い模範である」とのべていること... 以上、あまり知られることもなく、忘れられがちな大聖人である聖ヨセフへの、聖人達の信心と愛を述べてきました...

# 2021年4月拡大司祭・助祭会議議事録

開催日時：2021年4月6日(火) 10:30~12:30 開催場所：教区センター

※会議に先立ち、9時半から従軍司祭たちも参列して、聖堂で聖香油ミサが捧げられた。

## 1. 報告及び連絡事項：司会・マイケル神父。

- ・前回(3月会議)の議事録の確認—新田。前回議事録に記載された「聖ヨセフに対する信仰」は「聖ヨセフに対する信心」の誤りではないかと藤澤神父より疑義が述べられ、正しく「信心」と訂正された。
- ・2021年度那覇教区司祭人事について、ウェイン司教から発表があった。( )は前任地。
- ・小祿教会主任司祭、カプチン会地区長：マキシム・デソーザ神父(福岡)。
- ・真栄原教会主任、カトリック中学高校副校長：デニス・フェルナンデス神父(小祿)。
- ・石川教会主任：ヨアキム・ホアイ神父(真栄原)。
- ・アジット神父はさいたま教区へ異動が決まり、司教より感謝が述べられ、アジット神父からも会議の出席者に挨拶が述べられた。
- ・4月8日(木)に行われる石垣海星小学校の入学式にはウェイン司教が参列されることが報告された。
- ・カリタス那覇の四旬節キャンペーンについて、担当のマーシーさんから報告があった。数ヶ所の小教区を巡ってキャンペーンの呼びかけと協力依頼を行ってきたが、まだまだPR不足の所もあり、主任司祭たちへもカリタス那覇の取組みについて、信徒たちへもお知らせ願いたい旨要請された。ウェイン司教からも、それぞれの実情に合わせた対応が求められることが体験をもとに報告され、教会の中だけでなく、周りの方々とも協力しながら、助けを必要としている方々への多様なアプローチが必要であるとの認識を共有した。
- ・その他
- ・事務局長より、フィナンシャルレポート提出の際は、3月31日付けの残高証明証の添付を忘れずに、10日までに提出するよう依頼があった。
- ・クレーバー神父から、「命の電話」と「いのちの電話」、2つの似かよった呼称の相談窓口が見かけられるが、プロテスタントを中心としたキリスト教諸派が関わっているのはひらがなで書かれた「いのちの電話」であるので、間違えないよう注意喚起がなされた。
- ・典礼担当のブイ神父より、聖香油ミサで祝福、聖別された3つの油を、忘れずに持ち帰るよう司祭たちに依頼があった。
- ・保良教会の現状について、藤澤神父から報告があった。シスター達の住いとなるために、必要な変更が出てきたため、工期が伸びている状況ではあるが、ダルクとも話し合いながら概ね順調に進捗していることが説明された。

## 2. 審議事項

- ・聖ヨセフ年の全免償についてウェイン司教より説明がなされた。教区事務所から全小教区に掲示されるよう文書が出ているので、特に司祭たちは内容をよく把握した上で、信徒たちへも解説されるよう要請が行われた。
- ・司祭の年金制度について、津波古事務局長から説明が行われた。現行の国の年金制度は、外国籍の教区司祭たちには有利にならないので、教区として、外国籍の教区司祭たちのために年金代わる財政措置として、財形貯蓄という制度を利用して始めていきたい旨説明が行われた。修道会や宣教会はそれぞれの責任者との相談が必要になるため、まずは6名のベトナム籍の教区司祭たちを対象に本年4月から始めることが報告され、了承された。
- ・その他
- ・東日本大震災復興支援活動の終了についての報告と謝辞が司教団の復興支援室から送られて来ているので小教区に掲示するよう事務局から要請があった。それと関連して、10年という節目を迎えてもなお、東日本大震災後に難を逃れて沖縄に移り住んでいる方々が未だにおられるということにも心を配り、お祈りと共に、必要な支援をお願いしたいとの申し入れがあった。
- ・今会議は聖ヨセフへの祈りを持って閉会し、次回司祭助祭拡大会議は2021年5月11日(火)午前10時から12時、安里教区センターで開催されることが報告された。

2021年4月14日

承認：ウェイン・フランシス・バートン司教

記録：新田 選

復活徹夜祭におけるローソクの小さな光が闇を照らし、新しい命の希望、喜びの頂点であるイエスの復活へと、主は私たちを招いて下さった。

この平和な季節に、昨年から突如ふりかかった新型コロナウイルスは、世界大戦と評されるほどの勢いで世界中の人々を巻き込み、今なお終息することがない。緊迫した医療現場で立ち働く人たち、収入の場を失い生活が成り立たなくなった人たち、弱い立場の子どもたち、高齢者、年齢を問わず立場を問わず深刻な状況は目を追って拡大している。新聞、テレビ、ラジオの報道を見聞きするたびに不安はつのるばかりである。

その中で、小さな明かりを点すように、小学生の女の子が少しでも役に立ちたいと手作りマスクを福祉施設に贈り、お年寄りに手渡したニュースに多くの人が励まされた。ある料理店のオーナーは苦しい経営にもかかわらず、コロナ感染者の治療に当たっている医療従事者の皆さんに美味しいお弁当を届け、心と体を癒す奉仕をした。恵まれない子どもたちへの昼食サービス、その他にも、音楽や寄付などそれぞれの分野で工夫をこら

した支援をした人たちも多い。那覇教区でも昨年十月、困っている人たちへ家庭で使っていない食料品や日用品を提供して欲しいと呼びかけ、各小教区では集まった物品をそれぞれの社会福祉協議会などを通して困っている人たちへ届け、地域との絆を深めた。当具志川教会でも信徒の皆さんがたくさんの品々を持ち寄り、うるま市社会福祉協議会へ贈ることが出来た。教会

け、笑顔、祈りを通して……。ソーシャルディスタンスの時でも、祈ることによってより近く心を寄せ合うことが出来る。祈りは時空を超えて身近な家族から教会の兄弟姉妹、導いて下さっている司祭、修道者の皆さま、コロナ禍の中で頑張っている多くの人たち、感染し不安の中にいる人たちに届く。世界に目を向けると、思いもよらない不条理に苦しんでいる

**たて軸よこ軸**  
 コロナ禍の今できること

具志川教会 高江洲政子

の地域支援は初めての経験でもあり貴重な学びとなった。

このように、今、私たちに出来ることは限られた小さな働きではないが、マザーテレサの言葉のように「小さなことを大きな愛をもって行う」この思いを届けることが大切なのだと感じた。コロナ禍の中だからこそ、今だから出来ることを行う、そのことが目には見えない神様の存在を見える形に変えていくのではないか。周りの人への声掛

る人たちがいる。ミャンマーのクーデターによる軍事政権の暴挙に、命さえ脅かされ奪われている国民に心を留め、祈りを捧げたい。世界平和のため、私たちのため、絶えず祈って下さっているフランシスコ教皇さまへ、そして、私たちの知らないところで私たちのために祈って下さっている方に感謝の祈りが届きますように！ 祈りつつ静かに自分の心を見つめ、深めて行く大切な時が今である。

コロナワクチンが届く日を待つ中で、これからも感染しないように、させないよう細心の注意を払いながら、しつかり前を向いて歩いていきたい。アビラの聖テレジアの言葉は私たちの心を強く大らかにしてくれる。

精神のはげたき  
 何事にも煩わされず  
 何事にも動じるな。  
 すべては過ぎ去る。  
 神だけが不変  
 神をもつ人は不足を知らない。  
 神だけで充分だ。

沖縄はもうすぐ月桃の花咲く季節を迎え、平和を祈る慰霊の日も巡ってくる。

今この時期、教会の境内は色とりどりの花が咲き揃い心を和ませてくれる。三月の終わりごろ、四旬節の色で装ったスマイレに寄り添うように、純白の花びらを揺らす琉球小スマイレを発見した。主の復活を祝うかのような真白のスマイレは清らかに輝いていた。

今年はこのほか周りの自然が美しく目に映る。空も海も風も、全て神様からの贈り物。神に感謝！

**洗礼と堅信、初聖体  
おめでとございませす**

**開南教会**

- 二〇二一年四月三日
- マリア アントニオ 升子
- マリア アントニオ マリア

**石川教会**

- 二〇二一年四月三日
- テレサ 長田 智子
- ジョセフ 長田 令仁朗
- ベネディクト 長田 雪之丞
- 二〇二一年四月四日
- マリア 稲福 はるみ
- テレサ 稲福 みゆき
- テレサ 信子・カミユ
- モニカ アマンダ・本原
- モニカ 里 千枝美
- ミゲル・じん
- キャスリン・れい
- マキシマス・ゆう

**(初聖体)**

- モーゼ・ナグアン
- マグナス・ロバート・ナンナ
- 上田りか

**石垣教会**

- 二〇二一年四月三日
- クララ 鈴木 絵里子
- テレジア 奥久保 裕乃

前回の一月、二月号では、フェリクス・レイ神父は、オーバン神父が物資調達のためグアムに出かけていたため、琉球列島での最初のクリスマスを一人で迎えた模様の手紙を紹介した。今回は、オーバン神父と一緒に初めての四旬節と復活祭を迎え、悪戦苦闘して典礼の準備やミサを捧げたことについて、アメリカの友人たちに書き送ったオーバン神父の手紙を紹介いたします。説明書きの「」カッコ以外は原文のままの翻訳。

（押川壽夫名譽司教）

No. 300054

C/o Sr. M.G.O. Northern Ryukyus

APO 331

C/o Postmaster

San Francisco, California

March 30, 1948

Dear Friends,

親愛なる友人の皆さん、

前回の手紙は、私たちの必要なものの目録だけを書いたので、皆さんにとってはあまり刺激的ではなかったに違いありません。さて、私たちは神のみ摂理のもとで、ここでの長期にわたる滞在に向けて準備をしています。私たちの仕事はゼロからのスタートです、そして、我々の物質的な最初の関心事は活動手段を取得することです。その間、私達は比較的少ない

材料を必要とする分野で、できる限り最善を尽くしています。一方、霊的な分野では秘跡の奉仕の司牧的分野がありますが、その点でも、できる限りのことをしています。ここにいるカトリック信者は、この聖務であるミサを渴望しており、今、ミサにあずかれたことへの彼らの喜びが、それを授ける我々司祭にもひしひしと伝わってきます。

この手紙の内容は、私たちが琉球での最初の聖週間と復活祭をどのように過ごしたかについて、いくつかお伝えすることです。フェリクス神父は、少し前に迎えた最初のクリスマスに私が留守だった為に「ピンチ・ヒッター」として書き送った手紙「南の光明の二〇二一年一月号〜二月号掲載」の中で、クリスマスのお祝いについて述べています。ちょっとした「ほめ合い」にふけるだけでなく、何はともあれ、あなた方もご存知の通り、フェリクス神父は琉球ミッションでの私の長上ですからね。それを読んだ後、私はクリスマスに奄美大島にいなかったことを二重に後悔しました。憶えているように、クリスマスの日には、私はグアムで深夜から午前二時半まで、それから太平洋上を沖繩へ向けて飛行機の中、という具合で

した。

「枝の主日」には、私たちは「椰子の枝の祝別」をしました。ここでの私たちの伝統的な「ヤシの枝」は、現地の植物で「ソテツノ・エダ」でした。これは、見た目はヤシの枝とはあまり似ていません。こちらの「ソテツの葉」は光沢が豊かで、濃い緑色の、鋭い硬い葉を持つ枝です。

水曜日の午後、何人かのカトリック女子高生たちが石神さん（当時、神学生だった石神司教）のお手伝いに来て、聖域、教会、公教要理の教室、評議会室として使われている部屋の一部に、可愛い小さな祭壇を作ってくれました。祭壇の周りには、ここで豊富に栽培されている美しい白百合の花がたくさん生けてありました。

聖木曜日（ミサはフェリクス神父が祝ってくれました。十人の若い男女の聖歌隊が、ミサの中で、『MISSA DE ANGELIS』の「天使のミサ・歌ミサ」のミサ曲を、ミサ後の行列には、『PANGHE LINGUAN』の「聖体の讃美歌」のグレゴリアン聖歌を歌い、素晴らしい働きをしてくれました。「聖体の永久礼拝」では、一日中、いつでも少なくとも五人の人々がご聖体訪問をしていました。

けて、人々の要望に応じて告解を聴くのは、すべて日本語が堪能なフェリクス神父によって行われました。聖週間の間、彼は名瀬、大熊、浦上の人々の告解を聴きました。また、復活祭の朝の初聖体式に向けて、ボランティアのカテキスタたちが準備してくれた十六歳から二十歳までの四十人の若い男女を対象に、三時間の口頭試問を行いました。

フェリクス神父の活動は、聖木曜日には朝のミサとその他の儀式を行った後、彼は、名瀬から三マイル離れた大熊まで、ジープで行き、子供と十九歳の若い女性に洗礼を授けました。その後、名瀬に戻り、この熱心なカトリック信者の求道者である奥さんに洗礼を授けました。

私は聖金曜日の午前中に、聖金曜日の聖体拝領の儀式を行いました。午後には、聖土曜日の「復活ローソク」の祝別に必要な材料をどうやって手に入れるかを考え始めました。復活ローソク作りに、私たちの取り組みの様を写真に撮り、この手紙と一緒に皆さんに送ってあげたかったなあ〜！

「復活ローソク」の制作方法は、このようにして行われた。我々は直径一・五インチ、長さ二フィートの竹を手に入れました。竹の節

の内側の仕切りを削りとり、ローソクの表面が滑らかになるようにした後、完成したローソクが付着しないように、内側にスプレーを塗りました。そして、割った竹を半分ずつ貼り合わせて、輪ゴムで固定しました。十二インチのキャンドル二本を潰して、その芯を取り出し、縫い糸で端から端まで結び、この二フィートの芯を竹の型の中心に吊り下げ、「ルーブ・ゴードバーク（漫画の仕掛け）」の仕掛けの説明とは逆に張りを持たせた。

そして、七、八本の廃棄した口ウソクを溶かし、竹の型に蠟の液体を流し込み始めた。これらの予備作業の間、フェリクス神父は忙しくしていたので、「アルルバン・シンブサン」（オーバン神父を奄美の人が発音した通りに表記）が「お世話」をしていました。

私が思うに、琉球列島のどこかの島の現地民は、どこからともなく人の声が聞こえてきて、外国語で「何かサン」が、二十フィート離れた所へ叫んでいたの、戸惑ったに違いありません…。それは、一人の「シンブ家」の中にいる別の「シンブサン」に、「おい、フェリクス！蠟が床いっぱい溶けているよ〜」と叫んでいるに過ぎない光景のことですよ。

石神さんとフェリクス神父と私の三人で固まった蠟をこすり落し、竹の型枠の継ぎ目にコーキングをして、その危機を乗り切りました。数時間で、我々はビクビクしながら竹の型枠を開いたとき、我々は、まるで「醸造家シュリッツ氏」(ウィスコンシン州ミルウォーキーに本拠地を置くアメリカ最大のビール生産量を誇っていたビールの創始者)のように感じたものだった。彼が標準的な混合物の一つをサンプリングした後、満足したように。

「ローソク制作」の後、赤い蠟の釘(十字架のキリストの五つの傷のこと)を作ることが最初に議論され、その後、達成されました。私たちは、ローソクの使い残りを溶かし、それに赤いクレヨンを追加して成形し、適切に削って形を整え「五つの傷」を作った。我々の「復活大ローソク」は、都会のお洒落な人たちが大きな教会に置いてあるような上等のものではないかもしれませんが、私たちはこれを気に入っていた。

そして翌朝、フェリクス神父が『EXULTE』「復活賛歌」を歌ったとき、私たち二人はその聖歌の美しさを今まで聞いてきた以上にありがたく思いました。

聖土曜日、正午、石神さんと私は北部の大笠利という村に行き、復活祭の日に島での初めて復活ミサをすることになりました。大笠利は石神さんの故郷の村ですが、私たち神父が奄美大島に来て以来、石神さんは私たちと一緒に名瀬に滞在しています。

そして、私はあなたの方の誰かが、これほど忠実で、利己的でなく、疲れを知らない、一日二十四時間のカテキスト、聖具室係、通訳(彼はラテン語を使用)、ハウスポーイ、講師、秘書、走り使い、そして仲間である、「オーガスティン・タダマロ」を見たり聞いたりした人が、どこかにいるだろうか、私はその人に賭けます。

どこを探しても、いないと思いますよ。私たちが大島に滞在して最初の一週間、彼が「EST MAXIMUM GAUDIUM NIHI SERVIRE VOBIS」(あなた方に仕えることが私の最大の喜びです)と言った時のラテン語の言葉が、どれほど真摯なものであったかを、目を追うことに私たちに証明してくれている。一九四一年に徴兵制のために中断された神学の勉強を続け、司祭になるために彼が去っていくときには、私たちは彼を百通りの意味で寂しく思うことでしよう。彼のさ

まざまな任務の中で最も重要なものを選ぶことができるはずれば、彼が去った後、成人の求道者たちの宗教指導において、私たちは彼の喪失感を最も強く感じるようになるでしょう。現在、彼はこの仕事のすべてを行って

いるのです。私の復活祭二回目のミサは、最北端の「村」の中では中心的な村である赤木名で行われました。近い将来、私はここに住むことになりません。教会の敷地内には、旧ミッション時代の幼稚園(現在は学校として使われている)、旧教会(村での学校として使われている)、神父の住まいである司祭館

(現在は警察署の本部として使われている)が、それは戦時中に被害に会い、警官本人が修理したので、修理のために家に追加したものを持って出て行くと、家の半分が残るので、私の赤木名での仕事始めになります)があります。私たちが民家でミサをしたところ、八十人ほどの人が集まりました。赤木名からは、ジープの荷台にさらに三人の乗客とたくさんの荷物を乗せて、雨が降りしきる中、名瀬への帰路についた。聖土曜日の道路は良かったのですが、この雨は赤土をとって滑りやすく

してしまい、深いわだちが泥溜まりになっていました。しかし、私たちは途中一度も立ち止まることなく、無事十二時三十分には名瀬に着きました。カナリア号の四輪駆動と複合ローギアのおかげで、私たちが遭遇した悪い場所も、うまく乗りこなすことができました(始めての人のために、「カナリア号」とは、ミッションの黄色いジープのことです)。

一時四十五分、フェリクス神父と私は、名瀬からの六人の男性をジープの後部に乗せて、小さな公教要理教室の祝別のために大熊に向かいました。この村の私たちは、自分たちの力で助け合い、労働力と材料を集めて子供たちのための三十六フィート×十八フィートの建物を二ヶ月で建築しました。復活祭までに完成させるつもりでした。

フェリクス神父が建物を祝福した後、いくつかのスピーチがあり、その後夕食が行われました。もちろん食事には島のお酒が出てきました。教会の行事で許される純然たる量のお酒と、過剰な量のお酒との間の微妙な線引きがいかにかしいかを、私たちに直接教えてくれるほどの量でした。フェリクス神父が葬儀のため4時に近くの浦上で行われるた

め、私たちの気持ちを傷つけずに帰ることができました。

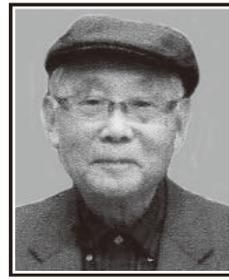
家に帰って夕食をとり、疲れていたのを早めに退散することにしました。しかし名瀬の人々は夕食後に我々の家で会議を開き、マリアナ諸島の使徒管理総責任者であり、琉球の使徒管理者でもあるグアムのアポリナリス・パウムガートナー大司教(O.F.M.C.A.P.)の歓迎について話し合っていました。司教は短い視察のために琉球を訪れることになっているのです。まあ、とにかく私たちは夜十時にはベッドに入りました。

明日、三月三十一日(水)、私は沖繩に向けて船で出発します。沖繩には二週間ほど滞在する予定だ。二ヶ月もすれば、また、色々な仕事山積みになって、定期的な沖繩に行かなくてはならない。私たちが、病人たちの死の床で聖体を授けるために呼ばれる恵みにあずかれるのは、いったい誰の祈りと犠牲と苦しみのせいかと、私はしばしば不思議に思えてならないのです。それは、あなた、そして、あなたも……と言いたい! どうか頑張ってください。主の祝福を祈り、感謝を込めて。琉球にて、オーバン神父

教区 NEWS 教会

トマス小崎登明修道士 追悼ミサ

コザ教会



コンベンツアル 聖フランシスコ修道会 トマス小崎登明修道士

会員が毎週木曜日に、コザ教会で各自の信仰生活を深める分かち合い、家族をはじめ教会共同体と地域社会の平和を求めて聖母マリアの取次ぎを願いつつ祈る「けがれなき聖母の騎士会」と呼ばれる信心会があります。この信心会は聖マキシミリアノ・コルベ神父によって創設されました。

四月十六日の長崎新聞によると、コルベ神父の研究者として知られ、聖母の騎士修道院内の聖コルベ記念館々長を勤められたコンベンツアル聖フランシスコ修道会のトマス小崎登明修道士が逝去されました。

私たちはささやかながら、四月二十二日(木)に小崎修道士追悼ミサをささげました。十九名が参加しました。祭壇上に小崎修道士



直筆のヨハネ福音書一五章五節「私はブドウの木であり、あなたたちは枝である。人がわたしの内に留まっておられ、わたしもその人の内に留まっているなら、その人は多くの実を結ぶ。」(文語体)と墨絵が描かれた掛け軸を掲げました  
なお、当日の特別献金をミサの様子を撮った写真とともにコンベンツアル聖フランシスコ修道会に送らせていただきました。  
慈しみ深い神よ、あなたに深い信頼を寄せてあなたのもとに旅立つ

たトマス小崎登明修道士が全ての罪から解放されて、永遠の喜びに生きることができまますように！  
(金城愛子通信員)

NPO 法人ぶどう園の会  
訪問看護ステーションクララ



TEL&FAX:098-937-5001  
住所 沖縄市泡瀬2丁目37-15  
・基本受付 月曜日～金曜日(申込、相談など)  
・営業時間 8:30～17:30  
・営業日 24時間365日(緊急対応含む)

計報

◆愛楽園教会  
マリア 天久 都代子 様  
二〇二二年四月八日帰天 享年九十七歳

◆開南教会  
アンジのフランシスコ 伊田 忠司様  
二〇二二年四月九日帰天 享年八十八歳

◆与那原教会  
クララ 大楠 ナヤ子 様  
二〇二二年四月二十五日帰天 享年八十八歳

葬祭の「やすらい企画」



私たちは故人とご遺族の意向を最優先に考えます。何でもご相談下さい。

那覇市首里鳥掘町4-57-3  
TEL&FAX:098-885-8205  
http://w1.nirai.ne.jp/yasurai  
E-mail:yasurai@nirai.ne.jp

24時間 受付

～ご遺族の心をもって奉仕する～  
そうてんしゃ

葬典社

\*創業30数余年・・・。  
\*皆様に支えられ「感謝」とともに人生を閉じるためのお手伝いをさせていただいております。  
\*ご質問、ご相談、24時間、いつでもお電話下さい。  
「ゆうなの会」会員募集中です。

ひが たかしげ  
(実務担当) 比嘉 高茂

24時間 受付

てんごく  
☎098-853-1059

